

紳士は妖婦がお好き Gentlemen Prefer Femmes-Fatales ——ヨーロッパ史を貫く三つの女性表象——

志賀亮一

ヨーロッパでは古来、数多くの女性図像が制作されてきたが、それらは、「母・妻・妖婦」の基本三極に収斂する。

このうち「母」は聖母マリアに代表され、それは長いあいだ理想の女性像とされ、その図像は、教会をはじめとする公共施設から、貧しい個人の家にもまで設置され、また若い女性の教育にも、産み育てるものの手本として提示されてきた—西欧美術史に残る数多くのマリア像を想起せよ—。また、「妻」は、夫=男性を助けつつ、家庭を管理するものとして、その像の多くは近代社会のブルジョワ家庭に存在した—たとえば十九世紀イギリスの人気画家、G=E・ヒックスの夫婦像—。この二つは、おそらく二十世紀半ばにいたるまで男性中心に構成されてきた社会で、いわば女性たちに対する規範的イメージとなってきた。それらの図像は、この男性中心のイデオロギーを固定・強化する一助となってきた。

ところが最後の「妖婦」はイヴに代表され、「母」や「妻」像の対極にある。それは、悪魔の化身したヘビに唆されたイヴがアダムにも禁断の実を勧め、その結果二人とも墮落したように、男性を誘惑しては墮落させる女性である。またこの墮落によって、アダムとイヴが永遠の生を剥奪され、楽園を追われたように、男性に害を一極端な場合には死をもたらす存在である。その図像の多くは、古代のイヴ、ユディト、サロメ—近代で名高いのは、ワイルドの『サロメ』に添えられたピアズリーのペン画—、クレオパトラから近代の

M・モンローまで、伝説の妖婦たちの像として描かれてきた。これはアンチ=模範像である。だが、なぜこのようなアンチ=模範像が存在したのか？

第一義的には、女性たち自身を戒める反面教師として、機能したにちがいない。なにしろ、長く続いた家父長制社会では、女性（とくに妻）が正式な夫以外と関係をもつことは、家系存続上最大の危機だったのだから。ついで男性たちに、表面上は身持ちを正すべしという教訓を示すために。最後に、この「妖婦」像は、近代になるともうひとつ別の要素を加える。つまり、とくに十九世紀以後女性たちの権利要求が目立つにつれて、「男性の領域を侵すもの」の姿が加味されるのである。だから、いわゆるブルー=ストッキングやサフラジェットたちは、醜い、あるいは滑稽な姿で戯画化される。

だがこれだけではあるまい。なぜなら、この「妖婦」像にこそ、とりわけ魅惑的な作品が多いからである。ところで、これら図像を生産したものは、近代以前はほぼすべて、近代になっても大部分男性だった。かれらはみな、女性に魅惑され、欲望を感じながら、他方では横目で道徳律をにらんでいたのではないのか？この矛盾が、多くの「妖婦」像をより魅惑的なものにしていないのか？ここにまた、「妖婦」像の興味深い側面があるように思われてならない。

(京都橋大学名誉教授)